

ブラジル系移民コミュニティと 二世世代男性の進路選択 ——横浜市鶴見区の学習教室の事例から

藤浪 海 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

キーワード：ブラジル系移民，ジェンダー，移民二世世代

横浜市鶴見区は大都市インナーシティには珍しいブラジル系移民集住地である。その相互扶助組織の学習教室の参与観察のなかで、ブラジル系の中学生たちのジェンダーによるある差異に気がついた。それは学業や進路に対する意識の差異である。女性たちは高校や高等教育への進学を一定程度自明のものとして捉えていたのに対し、男性のなかには学業や進学の実用性について根本的な疑問を抱く者が多かったのである。なぜこのような差異が生まれるのだろうか。

日本の移民二世世代研究ではその教育をめぐるマクロレベルの制度的・経済的背景や、ミクロレベルのエージェンシーについての検討がなされてきた。しかしそれらの視点だけでは、鶴見における上述のような差異、とりわけ男性の状況を十分に説明できない。そこで本稿では従来見落とされてきたメゾレベルの要因、すなわちコミュニティのジェンダーをめぐる構造に着目し、ジェンダーによる差異がなぜ生じ、そのもとで男性たちがいかに進路を選択しているのかを検討した。

相互扶助組織のブラジル系移民へのインタビューや学習教室の参与観察から、コミュニティの制度的網羅性のジェンダーによる不均等さが、二世世代男性たちの進路選択のあり様に影響を及ぼしていることを析出し、この事例から移民二世世代研究におけるコミュニティという分析水準の実用性、およびジェンダー視点からの男性二世世代研究の実用性について論じた。

1 はじめに

日本の大都市周辺には複数の外国人集住地が形成されてきた。京浜工業地帯の中核をなす横浜市鶴見区もそのひとつであり、2016 年末現在で1万1246人の外国籍住民が暮らしている（横浜市、2017）。鶴見は戦前から多くの在日朝鮮人や沖縄出身者が暮らしてきた歴史をもつが、何より興味深いのは現在では大都市周辺部には珍しいブラジル系移民集住地となっていることである。ブラジル系移民集住地の多くは、静岡県浜松市や群馬県伊勢崎市・大泉町など輸送機器製造業の拠点となる地方都市である。だが鶴見にはそのような大規模な製造業の工場は多くない。実際に鶴見の多くのブラジル系移民の職業は、後述するように他の集住地とは大きく異なっている。大都市周辺に位置

し産業のあり方も他の集住地と大きく異なる鶴見に、なぜブラジル系移民が集住し、そこでいかなる生活が営まれているのであろうか。筆者はこのような関心のもと、2012年からブラジル系移民の相互扶助組織を拠点として当該地区の調査を行ってきた。

筆者がその相互扶助組織の中学生向け学習教室で参与観察を始め、1年が過ぎた2015年2月のこと、ある男子中学生からの問いをきっかけに、ブラジル系の中学生におけるジェンダーによるある差異に気がついた。それは学業や進路に対する意識の差異である。その男子中学生は「なんで勉強する必要があるの！ 勉強する必要なんてないじゃん」と語り、進学への率直な疑問を示してくれた。これは調査のなかで多くの二世世代男性たちに問われてきた内容であり^{*1}、彼らに言わせれば、勉強しなくても就職できるし生きていけるのに、なぜ嫌いな勉強をしなければならないのか納得できないのだという。

振り返ってみれば、女性二世世代から投げかけられる問いは男性のそれとは大きく異なっていた。彼女らの問いは「留学ってどうすればできるの？」といった大学進学を前提にした問いや、学業や進学の必要性は一定程度認めたうえで「声優になるってどれくらい難しいの？」というような将来の職業を模索する問いであった。彼女らに勉強の意味について疑問に思わないのか問うてみても「高校に行って大学行きたいから（勉強は必要だと思う）」という答えや、「親から『勉強（しろ）』って言われるから、とりあえず勉強（する）」という消極的だが強い疑問を抱いていないと思われる答えが返ってきた。

なぜジェンダーによってこのような傾向の差異が生じるのだろうか。とりわけ学業や進学に疑問を抱いている男性たちは、いかに自らの進路を選びとっているのだろうか。彼らは単に学業から逃避したいから、上述のような問いを発しているのだろうか。そのような捉え方で、本当に良いのだろうか。学習教室の中学生との関わりあいのなかで、このような問いが立ち上がってきた。

日本において移民二世世代の教育に関する研究は数多くなされてきた。しかし二世世代をコミュニティの動態と関連づけて理解したり、ジェンダー視点から捉えたりするものはほとんどなかった。そこで本稿は上述のような問題関心から、移民二世世代の学業や進路に対する意識がどのようなコミュニティの力学のもと形成されるのか、特にそこにジェンダーがいかに介在するのかを明らかにすることとする。

(1) 先行研究

(a) マクロレベルの制度的・経済的背景に関する研究

移民二世世代については日本でもすでに多くの研究の蓄積があり、いくつかの論点が示されてきた。そのひとつが移民の置かれたマクロな制度的・経済的背景に着目する研究である。この観点からは単一文化主義的な学校文化や外国籍の子どもに対して非包摂的な教育制度の問題（宮島・太田編、2005）、移民の不安定な就労状況が二世世代の教育に負の影響を与えることなどが指摘されてきた（宮島、2014；山野上、2015）。

これらの指摘は日本全体の状況を見たときにまさに正鵠を得た指摘である。だが鶴見においては後述するように、高校進学への制度的取り組みが早くから展開され、また就労についても多くの

人々が起業し自営業化している。これらの点だけでは、なぜ第二世代男性たちが学業や進学について根本的な疑念を抱くようになるのか理解しきれない。

(b) ミクロレベルのエージェンシーに着目する研究

もうひとつ日本の第二世代研究で蓄積されてきたのが、移民のエージェンシーに着目する研究である。これは志水・清水編（2001）が代表的であり、各々の移民集団が日本での居住をいかに位置づけているかという「家族の物語」がその教育戦略に強く影響することが論じられてきた。進路選択についてもそれが「選択」である以上、上述のマクロな背景に加え、ミクロなエージェンシーに着目していくことは重要であろう。

しかしこれらの研究に問題がないわけではない。それは志水（2013）自身が指摘するように、「家族の物語」をキー概念とすると母親や父親、息子、娘といった家族内での立場の差異が捨象され、家族全員がひとつの物語を共有するかのように描き出されてしまう点である。実際には母親と父親で子どもについて同じ考えが共有されているとは限らない。また息子と娘、それぞれへの期待が一致するとも限らない。志水ほか（2013）はこの問題を認識しているものの、ブラジル系移民について家族内の立場の違いは焦点化されていない。

(c) メゾレベルのコミュニティとジェンダーに着目する研究

そこで参考になるのがジェンダー視点に立ち、メゾレベルのコミュニティに着目する移民第二世代研究である。このような研究は日本ではほとんど見当たらないが、アメリカ合衆国の文脈では、たとえばポルテスとルンバウト（Portes and Rumbaut, 2001=2014）が分節的同化理論を提示し、移民の家族やコミュニティにおける独特のジェンダー観が第二世代の教育に大きな影響を及ぼすことを示唆している。またチョウとバンクストン（Zhou and Bankston III, 2001）も、ニューオーリンズのベトナム系移民第二世代におけるジェンダーによる学力や進路選択の差異の背景に、父母の間で異なるジェンダーに関する意味付けと子どもへの働きかけがあることを明らかにしている。以上を踏まれば鶴見の事例においても、コミュニティというかれらの具体的な生活のなかで実践されるジェンダーのあり方に着目し、父親や母親から子どもへいかなる働きかけがなされるのかを検討する必要があるだろう。

ただし注意が必要なのは、こういった視点から取り上げられてきたのは多くの場合、女性であったことである。移民男性もまた「ジェンダー化された存在」であり、ジェンダー視点から男性を捉えなおすことは欠かせないはずであるが、この視点からの第二世代男性の検討はほとんどなされてこなかった。

(2) 課題と方法

以上のような先行研究の成果と限界を踏まえ、本稿では鶴見の学習教室に通うブラジル系の男子中学生たちが学業や進学についてなぜ根本的な疑念を抱くようになり、いかに進路を選び取っているのか、この問いをチョウとバンクストン（2001）を参考に父親と母親からの働きかけやコミュニ

表1 調査対象者一覧

	性別	移動経歴	親の学歴	高等教育進学希望	国籍(在留資格)
A	男	日本で出生後、すぐ渡伯、中学進学前に再来日		無	ブラジル／日本
B	男	日本生まれ日本育ち	母：大学卒業	無	ブラジル（永住）
C	男	日本生まれ日本育ち		無	ブラジル（永住）
D	男	日本生まれ日本育ち		無	ブラジル（永住）
E	男	日本生まれ日本育ち		無	ブラジル（永住）
F	男	日本生まれ日本育ち		無	ブラジル（永住）
G	男	日本生まれ日本育ち		無	ブラジル（永住）
H	男	日本生まれ日本育ち		無	ブラジル（定住）
I	男	ブラジルで出生後、すぐ来日		有	ブラジル（永住）
J	男	日本生まれ日本育ち		有	ブラジル／日本
K	女	日本生まれ日本育ち（ただし3～6歳時はブラジルに滞在）		有	ブラジル／日本
L	女	日本生まれ日本育ち	父：大学卒業	有	ブラジル（永住）
M	女	日本生まれ日本育ち	母：大学中退	有	ブラジル（永住）
N	女	日本生まれ日本育ち（ただし4～8歳時はブラジルに滞在）		有	ブラジル／日本

注：親の学歴について、記載なしのものは高校卒業（あるいは中退）であった。

ティのジェンダーをめぐる構造に着目しながら検討する。

筆者は2012年9月から上述の相互扶助組織を拠点として鶴見のコミュニティの調査を行い、地域の小学校の国際教室での参与観察やブラジル系移民第一世代と第二世代への聞き取り調査などを進めてきた^{*2}。それらを前提として、特にこの課題に向けては次の2つの調査を行った。

第一の調査は、2015年3月から2016年9月にかけて行った上述の学習教室での参与観察である。その目的は学習教室そのものの分析ではなく、中学生段階の移民第二世代の置かれている状況をインフォーマルな会話のなかで聞き取ることを主眼とした。この学習教室は講師1人につき生徒2～3名であり、対話のしやすい環境であった。各授業は1時間半で、中学生は週に2回教室に通っている。中学1年と2年の月謝は1万1000円、3年は1万5000円である。筆者は講師として週に2～3日、各日2コマ教室に参加し、かれらの直面する日常の困難や親との関係について聞き取った。

半年以上継続的に観察を行うことができた中学生は2015年3月から2016年9月の期間では、表1に示した男性10名と女性4名であった^{*3}。父親はほぼ全員が後述する電設業に従事しており、Mさんの父親のみ工場労働と電設業を掛け持ちしていた。男性の多くが高等教育への進学希望をもっていないなかでIさんとJさんは興味深い事例であるが、本稿ではまず男性たちの全体的な傾向を解明することとした。国籍や在留資格については二重国籍や永住資格の所有者が多く、日本での長期的な生活が見通されていた^{*4}。

第二の調査は、相互扶助組織スタッフ3名へのインタビューである。専従スタッフであるブラジル系40代女性Xさん（鶴見在住）と日本人50代女性Yさんには2016年4月26日にグループ・イ

ンタビューを行い、当該地域のブラジル系移民の生活状況や第二世代に関して寄せられる相談内容を伺った。当該団体は2000年にブラジル系移民によって設立され、移民第一世代に向けた日本語教室と第二世代に向けた学習教室を軸に移民の「自立」を目的とした事業を展開している。専従スタッフは渉外活動に奔走するブラジル系男性を加えた3名に過ぎないが、地域の南米系移民との広範なネットワークを確立しており、長年相談に対応してきたXさんは当該地域の移民の状況について熟知している。

また当該団体は、事業ごとに地域の南米系移民や日本人たちが協力して運営するネットワーク型組織である。鶴見在住のブラジル系40代女性Zさんも第一世代向けの日本語教室の講師を担っている人物であり、コミュニティの一員として、そして日本語教室の講師として、ブラジル系移民の親の状況をよく知っている。さらに地域の小学校においてもポルトガル語の通訳として入り込み支援を行っており、子どもたちの置かれている状況についても詳しい。そこで筆者は2015年9月から2016年1月にかけて彼女の日本語教室への参与観察を行いつつ、インフォーマルな会話のなかでZさんからコミュニティの状況について伺った。

本研究の対象となる学習教室の中学生については、以下の二点で留意が必要である。それは第一に、今回の事例を鶴見のブラジル系移民第二世代全体に安易に一般化できないことである。今回調査対象となった中学生の多くは成績の低迷などから、母親の判断によりこの教室に入っている。そのため調査対象者は、第二世代のなかでも学習に困難を抱えている層であると推定される。より成績の高い層などについては別途調査をする必要がある。

また第二に、本稿における「第二世代」がいわゆる1.5世を含んでいる点である。1.5世と日本で生まれ育った者とは言語や生活状況などについて差異があり、同一視できない。しかしそのうえで本稿が1.5世を事例に含むのは、1.5世男性において第二世代が直面する状況が特に顕著に表れていたためである。その具体的状況については、後述するAさんの事例のなかで示すこととした。

以下、第2節ではまず鶴見のコミュニティの特徴を集住過程と労働市場、教育制度の観点から整理する。第3節では第二世代男性が父親と母親からの異なる働きかけのもとで進路選択を行っていることを論じ、第4節ではその構造的背景にコミュニティの制度的網羅性のジェンダーによる不均等さがあることを考察する。

2 コミュニティの特徴

冒頭で示唆したように、鶴見は他のブラジル系移民集住地とは異なる特徴をもっている。そこでまず鶴見への集住過程と、先行研究で第二世代の教育に大きくかかわるとされてきた労働市場と教育制度について、その特徴を確認しておきたい。

(1) 集住過程

鶴見のブラジル系移民コミュニティの特徴のひとつは、その多くがサンパウロ市ピラカロン地区

出身の沖縄系の人々であることである。戦前、戦後を通じて沖縄から本土や海外へ向けて多くの出移民があったことは周知のとおりである。神奈川の工業地帯やブラジルはその主要な移住先であり、とりわけビラカロン地区や鶴見は沖縄出身者の一大集住地となっていた。

ビラカロンのコミュニティでは縫製業や食料品店などの分野で自営業化が進行していたが、それらの職業は1980年代のインフレにより大きな打撃を受けていた。その一方鶴見の沖縄出身者のなかには電設業等の自営業者も多く、それらの会社はバブル景気により人手不足に陥っていた。こうしたなかでこれらのコミュニティを結び付けていた沖縄系同士のディアスポラ・ネットワークが作動し、1980年代半ば以降ビラカロンから鶴見への移住が進行していった（藤浪, 2015）。

つまり鶴見は樋口（2005）の論ずる相互扶助型移住システムに近い形で移住が進展しており、市場媒介型移住システムによって集住が進展した東海地方などのコミュニティとはその集住のあり様が大きく異なっているのである。そうした経緯から浜松や豊田ほどの大規模な集住には至っていないものの、鶴見区には2016年末時点で1134名ものブラジル国籍者が暮らしている（横浜市, 2017）。

（2）労働市場

こうした移動局面での特徴は、鶴見の独特な労働市場のあり様も生み出した。東海地方などのブラジル系移民集住地では、その多くが製造業などの工場で非正規労働者として働いている。だが鶴見では男性移民の多くが沖縄出身の日本人の経営していた電設業者で働き、その後独立し自営業化している（樋口, 2012）。鶴見では自営電設業がエスニックな労働市場となっているのである。

もちろんこれらの会社は大手建設会社の下請けであり、安定しているとはとても言い切れない。ただしそれでも東海地方のように経済変動に大きく左右されることは少なく、リーマンショックについても鶴見の電設業者たちによれば、製造業ほどの大きな影響はなかったという。また非正規労働者の場合、より良い条件を求めて職を転々とし居住する場所が定まらないという問題が起こりがちであるが、鶴見では長く当該地域に居住し続けている者も多い（清水, 2015）。

以上のように鶴見は、工場等での「フレキシブルな労働力」となっている東海地方などのコミュニティとはかなり異なる状況にある。このことを踏まえれば、不安定な就労状況が第二世代の教育に強く負の影響を与えるという指摘は鶴見の場合には十分当てはめることはできない。

ただし電設業というエスニックな労働市場がジェンダー化されていることは注意しておく必要がある。鶴見の移民たちは電設業について、それをよく「男の仕事」と表現する。その背景には電設業が力仕事であることだけでなく、危険な作業を伴うことや荒い言葉遣いが飛び交っているということもある。女性については鶴見には給料の良い仕事は少なく（福田, 2009）、彼女たちの多くは小規模工場等での非正規労働者として働いている。こうしたジェンダーによる状況の差異は後述するように第二世代の教育に大きく影響するのだが、差し当たりここでは東海地方と同様の影響を及ぼすものとして労働市場を見ることはできないことを確認しておこう。

（3）教育制度

次に教育制度に関して、先行研究で指摘されてきた移民が排除されやすい制度的構造や単一文化

的な学校文化の問題は、もちろん鶴見においても一定程度当てはまる。ただし1990年代前半から他の集住地に先駆けて取り組みが進み、高校進学への制度的な方向づけがあったことは留意しておく必要がある。

鶴見では「沖縄」を軸とした日本人と移民たちとのつながりがあり、集住の早い段階からインフォーマルな形での支援活動がなされていた（広田，2003；藤原，2008）。そうしたなかで学校教師らとの支援組織が立ち上げられ、そこから移民第二世代へのさまざまな取り組みが進展していった（沼尾，1996）。高校進学についても、集住地区にある高校に外国出身者の入学枠^{*5}を設置する取り組みがすでに1994年から現場の教師たちによってなされていた（梅本ほか，2013）。

筆者のこれまでの調査でも、1990年代半ばにこの制度を利用して高校進学を果たした複数のブラジル系移民を確認できた。近年では多くの子どもが日本生まれになったためこの制度を利用するブラジル系の中学生はかなり少なくなったが、この制度によりコミュニティのなかに高校進学者というロールモデルが多く生み出されたことは、その後続世代の進路選択にも大きな影響を及ぼしうる。

このような状況を踏まえれば、冒頭で示したように学習教室の女性たちが高校や高等教育への進学を前提にした発言をしていることは理解できるものである。しかしその一方で、なぜ男性たちは学業や進学について根本的な疑問を抱くようになるのであろうか。この点はさらにもう一步踏み込んで検討する必要がある。

3 両親からの働きかけと第二世代男性の進路選択

(1) 父親からの働きかけ

そこで今度は、父親と母親から第二世代男性たちへの働きかけというよりミクロな水準に着目してみたい。まず父親について、先述したように鶴見では多くの男性移民が電設業で就労している。彼らの多くは自営業が盛んなビラカロン地区出身であることから、彼らが自営業に付す評価は高い。また電設業についても、製造業等の工場労働者としてでは得られない、ブラジルでも通用するスキルを身につけられることから高い評価を付している。そうした背景から息子に電設業を継いでほしいという希望をもつ父親も少なくなく、さまざまな働きかけのなかで、もともと学校での勉強に苦手意識をもつ子どもたちにとって電設業での就労を魅力的なものとしていた。

ここで1.5世男性、Aさんの事例を紹介したい。彼の父親は高校卒業後にブラジルから鶴見に移住し、やはり電設業に従事している。母親も鶴見に暮らしAさんを日本で産んだが、仕事が忙しかったため、Aさんは生後すぐにサンパウロ州サントス市の祖父母に預けられ、中学校進学直前に来日している。彼の来日から1年ほど経ってきた頃、通常では中学生が購入できないような高級ブランドの時計を身につけて学習教室にやってきた。

＊：それどうしたの、時計。それ高そうだね。

A：そう、もらった。俺の宝物。

＊：へー。すごいね。誰からそんなものもらえるの？

A：父ちゃん。高かったって。いいでしょ。

*：いいなー。でも、誕生日か何かだったっけ？

A：いや、まあいろいろ頑張ったからね。

*：ふーん。いいなあ。良かったね^{*6}。

この話を聞いた当初は、学校での勉強を頑張ったから買ってもらったのかなどと筆者は勝手な解釈をしていた。だが経済的に楽とはいえないはずなのに、なぜこんなにも高価なプレゼントをするのだろうという疑問は残り続けていた。

この解釈が間違っていたことに気づいたのは、それからしばらく経ってからであった。彼はそのとき学習教室に大量のカードゲームをもってやってきた。よく話を聞いてみると、この半年ほどで6～7万円ほどかけてカードを購入していたのだという。なぜAさんはこれほどのものが買えたのだろうか。筆者はこの疑問をAさんに問うてみた。

*：全部自分のお小遣いで買えたの？

A：そう。

*：いくらぐらいお小遣いもらってるの？

A：お小遣いっていうか、働いたお金ね。

*：働いたお金？

A：そう、父ちゃんの仕事、手伝っているから。

*：あーそうなんだ。電気の仕事？ でも学校あるじゃん。

A：学校ない日だけ。土曜日と日曜日^{*7}。

Aさんはこのように、父親に電設業の現場の「見学」に連れて行ってもらい、「お小遣い」を受け取っていたのである。Aさんの進路について、彼の父親は「自分も親に好きにさせてもらったから、好きな道を選んでいい」と言っているという。しかし現場での「見学」は、1.5世でありもと学校での勉強に苦戦していたAさんにとって電設業という職業を、金を手に入れるだけでなく、仕事を見て学ぶことのできる魅力的なものとしていた。こうしたなかでAさんは学校での学業や進学よりも、むしろ電設業での就労を現実的な選択肢として認識するようになっていき、将来の夢を「電気屋」^{*8}と答えるようになっていた。

こうした構造は、日本の学校への適応が特に大きな課題となる1.5世のAさんにとりわけ顕著に示されているものであるが、日本生まれの者においても程度の差はあれ、その文化的・言語的背景から学業に困難が生じがちである。そうした状況において現場での「見学」を経験したり、あるいはそうせずとも父親から日常的に「まあ学校（高校）落ちたら、うちの店継ぐか」などと尋ねられたりするなかで、二世世代男性たちは学業や進学よりも電設業に関心を抱くようになる。日本生まれ日本育ちの男子中学生Bさんとの次の会話も、こうした状況をよく示すものである。

*：(授業中寝ていたBに) どうしたの？ 勉強は？

B：勉強もういい。

*：なんで？

B：なんで勉強しなきゃいけないの！

*：うーん、そうだねー、まあいろいろ理由はあるけど。たとえば将来の仕事とかにも関係あるよね。

B：仕事？ 別に良いよ、親父の会社で働くから。うち社長だよ！ 電気会社で働けば、普通に生活できるし。もういいよ、勉強。勉強しなくて、生きていけるじゃん！ 一人暮らしするのにどれくらいかかるの？

*：まあ 15 万から 20 万ぐらいあれば、とりあえず生きていけないことはないけど……。

B：余裕！ そんなうちの会社で働けば余裕っしょ。^{*9}

電設業で働く B さんの父親は高等教育へ進学しておらず、B さんは無理に進学をせずとも電設業者として生きていけることを知っている。なぜ勉強をしなければならないのかという問いは、単に学業からの「逃避」として片づけられるものではなく、以上のような状況のなかで思い描いた自らの将来の職業との関係において提出された問いであったのである。

冒頭で筆者は彼らが学業や進学に疑念を抱いていると論じた。しかし以上の検討からは、それが正確なものではないことが分かる。正確にはそれは、自らが将来像として描く電設業と一見関係のないように映る中学校での学習内容や普通科高校への進学への疑念だったのである。彼らのなかには学校での成績の低下という現実と直面しつつ、将来の職につながる進学先として工業高校を積極的に選び取る者もあり^{*10}、たとえば G さんはすでに中学 2 年の段階で、志望校として工業高校を挙げていた。

(2) 母親からの働きかけ

以上のようにして息子たちが電設業に関心を抱くようになる一方、母親たちのなかには高等教育への進学を願う者も多い。鶴見では子育ての主な担い手は母親たちである。A さんも B さんも、日常で会話するのは父親より母親の方が圧倒的に多いと語っていた。しかしそれにもかかわらず、なぜ母親たちの希望はなかなか叶わないのだろうか。

学習教室に通う男性たちに母親から進路や将来について何か言われたりしないのかと聞いても、「勉強しろぐらい」「特に何も」などといった答えしか返ってこない。母親たちに直接聞いても「大学に進学してほしいけど、でも（子どもがそれを希望しないなら）仕方がないから」など諦めに似た言葉が多い。これはなぜなのだろうか。

これまでの母親たちへの聞き取りや今回の相互扶助組織のメンバーへの聞き取りからは、この背景に母親から子どもへの働きかけを困難にする鶴見の構造的特徴があることが見えてきた。次の図 1 はその仕組みを示したものである。

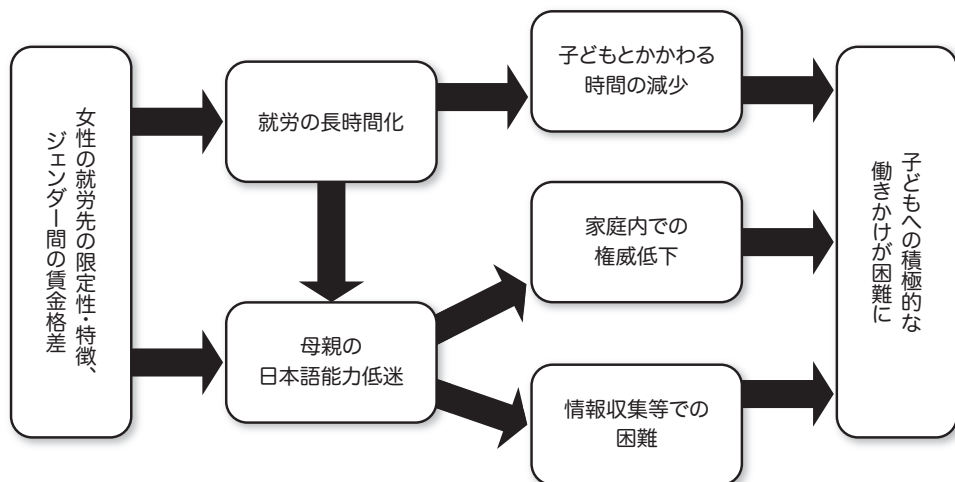


図1 鶴見のコミュニティにおいて母親の困難が生み出される仕組み

(a) 就労の長時間化

まず図1上段の就労の長時間化について、鶴見では移民女性の就労可能な職場は、集住地から離れたリサイクル工場や地域の小規模工場に限られてしまう。高い賃金を望まなければコンビニなど近隣にも就労先はあるのではないかとと思われる。しかし相互扶助組織のブラジル系移民女性Xさんによれば、現実にはそれらへの就労も難しいという。

X：でもやっぱりね、もうちょっと日本語覚えたら、近くのスーパー、コンビニ働ける、バイトできるじゃん。

Y：そこまではできない？

X：できない。だからすごいな、なんかファミマ行って、中国人（働いている）じゃん。でもあれね、たぶん学生だよな。（中略）もうちょっと日本語できればああいう仕事ね、そうしたら家の近くでね（働けるのに）。

Y：そういうのやっている人いない？ ブラジル人のお母さん。

X：いない。

Y：やっぱり言葉の問題で？

X：だと思うよ。だってどうやってレジとか、もし宅急便とか（来たら）どうやってやるの。たぶん箱来て登録して機械にいろいろやらなくちゃいけない。^{*11}

鶴見には女性も働ける大規模な工場は少ない。労働者として敬遠されがちな時間的制約のある「母親」であり、日本語能力の十分ではない「外国人」である彼女らにとって、鶴見で働けるのは移民同士のネットワークにより確保できた数少ない工場に限られる。こうした状況ゆえ彼女たちは就

労先を一度失うと、新たにそれを見つけるのはかなり困難になる。たとえばBさんの母親も筆者の調査中に失業し、その後も仕事を見つけれられていない状況にあった。こうした状況の中で彼女たちは、解雇を回避するため、工場の都合に合わせ労働時間を引き延ばさなければならなくなる。Aさんが中学進学までブラジルの祖父母に預けられていたのは、彼の母親が仕事で多忙なためであったことを思い出されたい。さらに母親たちは、家事など家庭内の再生産労働全般も担っている。こうした状況の中で子どもとかかわる時間は減少し、学業や進学についての積極的な働きかけは困難になっていく。

もうひとつ就労時間を引き延ばす要因に、ジェンダーによる賃金格差も挙げられる。このことを最初に教えてくれたのは、相互扶助組織の日本語教室において講師を担当しているブラジル系移民女性Zさんであった。日本語教室の休憩中、彼女は筆者に次のようなことを教えてくれた。

Z：やっぱりね、親がきちんと子どもの面倒を見るべきなんですよ。

*：でも仕事で大変だったりするんじゃないですか？ 非正規で、時間もバラバラだし。

Z：うーん、仕事が大変っていうか、私から見ると競争しているように見える。

*：競争？

Z：そう、旦那とね、仕事で競争してる。だから仕事を増やして増やして。それで子どもの面倒を見れなくなる。特に小学校低学年の場合はね、小学校に鉛筆すらもってこない子もいる。親がきちんと子どもの面倒見ていないとダメですよ、やっぱり。^{*12}

つまり女性たちは、男性パートナーとの間で収入に関する闘争を繰り広げているというのである。自営電設業を営む男性と、工場等で非正規労働者として働く女性たち。鶴見のコミュニティでは構造的に男女間の収入格差が大きくなってしまふ。それゆえ女性が男性と同等の稼ぎを生み出すことはかなり困難である。それにもかかわらず、だがそれゆえにこそ、彼女たちはますます自身の労働時間を引き延ばしていく。これまで筆者が行ってきた第一世代へのインタビュー調査のなかでも、ジェンダーによる賃金格差に関する不満を表明する女性は多かった。キブリア (Kibria, 1993) やペサル (Pessar, 1999) はアメリカ合衆国の文脈から女性の家庭外での労働が家庭内での男女間の権力格差を縮小させることを指摘したが、鶴見ではその逆の事態が起きているのである。

(b) 日本語能力の低迷

次に図1下段の日本語能力の低迷について検討したい。男性たちが電設業の現場で日本語能力を半強制的に身につけさせられるのに対し^{*13}、女性の多くは日本語能力を求められない工場で就労している。それゆえ仕事で多忙ななか無理して大幅な自助努力がなされない限り、どうしても彼女たちの日本語能力は低くなってしまふ。たとえばAさんの母親は日本語での会話が難しい状況にあり、Bさんの母親は大卒で日本語での日常会話は問題ないものの漢字の読み取りに困難を抱えていた^{*14}。そのような状況においては、時として高度な日本語能力が要求される進学の情報の獲得は難しいものとなってしまふ。

またこのようなホスト社会の言語や文化に関する知識の格差は親子間の権力関係の逆転をもたらす (Portes and Rumbaut, 2001=2014), 子どもへの働きかけをますます困難にする。たとえばBさんの母親はこの点に悩みを抱え、Bさんへの働きかけがうまくできずにいた。そこで彼女はBさんへのさまざまな要望を学習教室の講師に伝え、講師からそれをBさんに伝えるなどの戦術を取っていた^{*15}。

さらにコミュニティ内で流通する情報の内容も彼女たちの制約となる。鶴見ではその集住の経緯から、移民同士のネットワークは強い。また多言語の案内も行政は用意している。だがそれらがカバーできるのは地域の小中学校の情報までである。とりわけ入試・奨学金制度が複雑になっている大学や専門学校に関する情報の獲得は、彼女たちにとって困難なものとなってしまう。

以上のように子どもへの働きかけにおいて母親たちは、複数の制約に直面せざるを得ない。こうした状況のなかで「大学に進学してほしいけど、でも仕方がないから」という諦めが生じるのである。金銭的負担も比較的軽く、またポルトガル語での情報のやり取りも可能な相互扶助組織の学習教室に通級させるのは、こうした状況のなかでの彼女たちが取れる数少ない戦術であったのである。

4 ジェンダーによる不均等な制度的網羅性

以上のように、学習教室に通う男子中学生の学業や進路選択に対する意識は、父親と母親の異なる働きかけのあり様のなかで形成されている。鶴見においてこの働きかけの差異をもたらす構造的要因となっているのは、電設業というジェンダー化されたエスニックな労働市場の存在である。教育や衣食住、仕事、医療などについてのメンバーのニーズに応えることができるコミュニティの能力を、ブレトン (Breton, 1964) はコミュニティの制度的網羅性とよぶ。自営電設会社の存在は、仕事に関するニーズをみたすことのできるコミュニティの制度的網羅性にかかわるものとして理解することができるだろう。

ブレトン (1964) は制度的網羅性をコミュニティのメンバーに普遍的なものとしてみている。しかし今回の事例で重要なのは「誰にとって」制度的網羅性が高いのかという点である。鶴見では男性にとっての労働市場は作り出されていても、女性にとって魅力的な労働市場は作り出せておらず、この意味でジェンダーによってコミュニティの制度的網羅性の高さは異なっているのである。

そして今回の事例ではこのジェンダー化されたコミュニティの構造こそが、第二世代男性自身のあり方に大きな影響を及ぼしていた。従来日本の移民第二世代研究においてはコミュニティの構造と第二世代との関係についてはほとんど触れられてこなかった。しかしここからはいかに移住が進展しどのようなコミュニティが形成されたのか、第二世代のあり様に強く影響することが示唆されているといえよう。

5 おわりに

最初の問いに戻ろう。鶴見の学習教室に通うブラジル系の中学生において、ジェンダーによって学業や進学に関する意識に差異がみられ、男性たちのなかにはそれへの根本的な疑問を抱く者も多かった。なぜ男性たちは疑問を抱き、そのなかでいかに進路を選び取っているのか。本稿ではこの問いを、鶴見のジェンダー化されたコミュニティの構造に着目しながら検討した。

第2節では、沖縄系のディアスポラ・ネットワークによる集住という経緯から、比較的安定した経済状況と早期からの高校進学への制度的方向づけがあったことを確認し、それらだけでは上述の問いを解けないことを論じた。それを受け第3節では、父親と母親からの働きかけというよりミクロな水準からの検討を試みた。母親たちのなかには高等教育への進学を望む者も多いが、彼女らは時間的・言語的制約から学業や進学に関する積極的な働きかけが困難な状況にあった。その一方で父親との日常的なやり取りや現場での「見学」の経験は、息子たちの関心を電設業へと向かわせていた。一見進学に対し否定的態度をとっているかのように見えた男子中学生らは、そうした状況のなかで実は電設業につながる進路を模索していたことを論じた。最後に第4節では、コミュニティのジェンダーによる不均等な制度的網羅性こそが、上述のような状況を作り出す構造的要因となっていることを考察した。

本稿には対象者の限定性をはじめとして、1.5世と日本生まれの者たちとの間の差異や女性第二世代の状況、ピア・グループからの影響への言及の不足など限界も多い。また一人親家庭を今回の対象者には含むことができなかったほか、学習教室への継続的な通級が第二世代にもたらす影響、高等教育への進学を志すIさんやJさん、そして将来の居住国が明確でないHさんのような事例についてもさらなる検討が必要である。

これらは今後の課題としたいが、今回の事例からは移民第二世代研究に対する次の2つの知見を引き出すことができる。それは第一にコミュニティの視点の必要性である。日本の移民第二世代研究では、コミュニティの視点をもつものはほとんどなかった。だが移民ネットワーク論の視点からいえば、出身国が同じでも移動のあり方が異なれば、コミュニティの形も大きく異なる可能性がある。そしてそれは、本稿で示したように、第二世代のあり方に大きく影響しうる。

第二に男性を検討する際のジェンダー視点の必要性である。ジェンダー視点からの第二世代研究は日本では未だ数少なく、海外でのそれも多くは女性に焦点を当てている。しかし以上に論じてきたように、男性第二世代も決してジェンダーと無関係な存在ではない。主に女性移民研究で培われてきたジェンダーという視点を、いかに第二世代男性を見る際に用いることができるのか。鶴見の男子中学生に関しても、彼らが成績低下という現実と直面しつつ学校内でいかに生き残り戦術を駆使しているのかなど、検討すべき課題は多く残されている。これらの課題の検討を通して、移民第二世代研究におけるジェンダー視点をさらに彫琢していきたい。

- *1 本稿では「移民第二世代」を、日本で生まれ育った者だけでなく、いわゆる1.5世、すなわち他国で育ち、日本の初等教育が終わる12歳以前の段階で来日した者を含む概念として用いる。
- *2 鶴見においてはブラジル系移民第一世代17名（男性5名、女性12名）と第二世代8名（男性1名、女性7名）に聞き取りを行ってきた。加えて鶴見からブラジルへ帰還した移民22名（男性16名、女性6名）についても聞き取りを行ってきた。また調査という名目ではなかったものの、当該団体に寄せられるブラジル系移民からの相談にも一部対応してきた。
- *3 予備調査として参与観察を行っていた2014年から2015年2月の期間を含め、調査の全過程においては男性12名／女性6名の中学生を観察した。
- *4 ただし定住資格のHさんは両親から「ブラジルに帰る」と言われ続けており、将来の居住国について見通しが立っていなかった。彼のような事例も重要な検討対象であるが、ほかの対象者と状況が異なるためその分析は別稿に譲ることとした。
- *5 外国籍または、日本国籍を取得して3年以内で、日本での在留期間が通算3年以内の人を対象とする「在県外国人等特別募集」のこと。
- *6 2015年9月3日の学習教室での会話。
- *7 2015年12月20日の学習教室での会話。
- *8 鶴見のブラジル系移民らは電設会社を「電気屋」と表現する。
- *9 2015年7月3日の学習教室での会話。
- *10 たとえばEさんは母親に高校や大学への進学について学費は心配しなくてもよいと言われつつも、経済的に余裕があるとはいえない家族を助けたいがために、将来の職につながる事が重要だと語っていた。
- *11 2016年4月26日のインタビュー。
- *12 2015年12月12日の日本語教室休憩時間中の会話。
- *13 彼らは建設現場での外国人差別を回避するために、日本語を用いなければならない。各種免許には「本籍沖縄」と記し、多少のアクセントの違いも「沖縄出身」として通す。
- *14 相互扶助組織の日本語教室の名称には「保護者のための」という言葉が冠せられ、以上のような母親の困難を背景に、再生産労働で用いる日本語に特化した授業が展開されている。Bさんの母親はその教室の生徒でもある。
- *15 勉強だけでなく、普段の生活態度に関する要望なども講師に伝えられた。また親には試験の成績を見せようとしないうえ、Bさんの母親はそれを講師に確認してもらうことでBさんの学習状況を把握するという行っていた。

《参考文献》

- ・ 梅本霊那・小林宏美・坪谷美欧子, 2013「インタビュー：外国につながる生徒受け入れの原点——寛政高校時代における姿勢と経験（元教頭への聞き取りから）」坪谷美欧子・小林宏美編『人権と多文化共生の高校——外国につながる生徒たちと鶴見総合高校の実践』明石書店, 54～72頁
- ・ 志水宏吉, 2013「往還する人々の教育戦略」志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛冶 致・ハヤシザキカズヒコ編『「往還する人々」の教育戦略——グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』明石書店, 9～24頁
- ・ 志水宏吉・清水睦美編, 2001『ニューカマーと教育——学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』明石書店
- ・ 志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛冶 致・ハヤシザキカズヒコ編, 2013『「往還する人々」の教育戦略——グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』明石書店
- ・ 清水沙耶香, 2015「横浜市鶴見区在住日系南米人の移動経歴とルーツ」名古屋大学地理学教室ワーキングペーパー No. 2015-2
- ・ 沼尾 実, 1996『多文化共生をめざす地域づくり——横浜、鶴見、潮田からの報告』明石書店
- ・ 樋口直人, 2005「移住システムと移民コミュニティの形成——移住ネットワーク論から見た移住過程」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会, 76～105頁
- ・ 樋口直人, 2012「鶴見で起業する——京浜工業地帯の南米系電気工事業者たち」樋口直人編『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社, 251～276頁
- ・ 広田康生, 2003『エスニシティと都市（新版）』有信堂高文社

- 福田友子, 2009「流入労働者たちの系譜——沖縄出身者, 在日コリアン, 日系ラテンアメリカ人の集住地域としての鶴見」玉野和志・浅野達人編『東京大都市圏の空間形成とコミュニティ』古今書院, 171～194 頁
- 藤浪 海, 2015「移民ネットワークとしてのオキナワン・ディアスポラ——横浜市鶴見区のブラジル系・ボリビア系・アルゼンチン系移民の事例から」関東社会学会編『年報社会学論集』28 号, 64～75 頁
- 藤原法子, 2008『トランスローカル・コミュニティ——越境する子ども・家族・女性／エスニック・スクール』ハーベスト社
- 宮島 喬, 2014『外国人の子どもの教育——就学の現状と教育を受ける権利』東京大学出版会
- 宮島 喬・太田晴雄編, 2005『外国人の子どもの日本での教育——不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会
- 山野上麻衣, 2015「ニューカマー外国人の子どもたちをめぐる環境の変遷——経済危機後の変動期に焦点化して」東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター編『多言語多文化——実践と研究』7 号, 116～141 頁
- 横浜市HP内「横浜市区別外国人人口（平成 28 年 12 月末現在）」(<http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/jinko/non-jp/new-j.html>, 2017 年 1 月 14 日アクセス)
- Breton, R., 1964, Institutional Completeness of Ethnic Communities and the Personal Relations of Immigrants, *American Journal of Sociology* 70(2), pp.193-205.
- Kibria, N., 1993, *Family Tightrope: The Changing Lives of Vietnamese Americans*, Princeton University Press.
- Pessar, R. P., 1999, Engendering Migration Studies: The Case of New Immigrants in the United States, *American Behavioral Scientist* 42, pp.577-600.
- Portes, A. and Rumbaut G. R., 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, University of California Press. (=2014, 村井忠政ほか訳『現代アメリカ移民第二世代の研究——移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店)
- Zhou, M. and Bankston III L. C., 2001, Family Pressure and the Educational Experience of the Daughters of Vietnamese Refugees, *International Migration* 39(4), pp.133-151.

The Career-Path Selections of Second Generation Men and the Brazilian Community:

The Case of the Study Support Class in Tsurumi, Yokohama

FUJINAMI Kai *Hitotsubashi University*

Key Words: Brazilian migrants, gender, second generation migrants

This paper aims to reveal the relation between the structure of migrant community and the career-path selections of second generation men from the case of Brazilian community in Tsurumi, Yokohama. In the participant observation in the study support class for Brazilian junior high school students, the author found a certain difference between genders. That is the difference of thoughts on schoolwork and courses after graduation from junior high school. Women have a tendency to hope to proceed to higher education. By contrast, men have suspicions on schoolwork and proceeding there. Why are there such differences? Especially, why do men have such suspicions and what course do they take after graduating from junior high school?

Japanese previous research on migrants' education discusses macro and micro level factors, such as structural backgrounds and agency. Nevertheless, we cannot explain above-mentioned questions from such standpoints. Therefore, to examine second generation men's tendency, the author focuses on meso level factors, that is, the gendered structure of the migrant community.

From the interviews and participant observation in the class, the author reveals that the ethnicized and gendered labor market of this community makes the gender gap of institutional completeness of the community and it affects mothers' and fathers' pressures to their sons and above-mentioned men's thoughts. From this result, the author suggests the need to focus on the gendered structure of migrant community not only when analyzing second generation women, but also when analyzing second generation men.